



大人と子どものための
世界のむかし話

6

ペルー ボリビアのむかし話

インカにつたわる話



加藤隆浩・編訳



編著者／加藤隆浩(かとう たかひろ)

1952年愛知県に生まれる。南山大学
大学院文化人類学科卒業後、メキシ
コ・イペロアメリカーナ大学社会人
類学博士課程修了。1983～85年、中
央ベルーにて民族学的調査に従事。
現在、名古屋聖霊短期大学専任講師。
訳書にA. オルティス『アダネバか
らインカリへ』ほかがある。

世界のむかし話⑥

ペルー・ボリビアのむかし話——インカにつたわる話

編著者 加藤隆浩

発行 1989年10月 初版1刷

発行者 今村 廣

発行所 東京都新宿区市が谷砂土原町3-5 偕成社

☎(03)260 3221(販売)・(03)260-3229(編集)

印刷製本 新興印刷製本株式会社

NDC388 164p 22cm

ISBN4-03-535060-5

Published by KAISEI-SHA, Tokyo 1989

Printed in Japan.

©Takahiro KATŌ 1989

落丁本・乱丁本はおとりかえます。

*偕成社は、平日も休日も24時間、電話でもFAXでも本のご注文をお受け
しています。ご利用ください。電話 03-260-3221(代) FAX 03-267-0124

大人と子どものための
世界のむかし話

6

ペルー ボリビアのむかし話

インカにつたわる話

加藤隆浩 編著

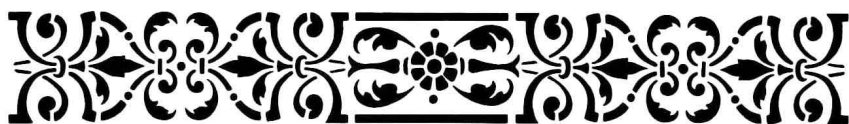


はじめに

十三世紀中ごろ、南アメリカ・アンデス山脈の高地にあるクスコという町を中心に、小さな王国があらわれました。

この国は時とともに大きくなり、十五世紀末には現在のペルー、ポリビアからチリ、アルゼンチンの一部にもまたがる大帝国となりました。これがインカ帝国です。

やがてこの国はスペインによって征服され、ほろびてしまいました。しかしその子孫はいまも生きつづけ、スペイン文化、とくにキリスト教（カトリック）の影響を大きくうけながらも、それをインカ風に味つけし、祖先の伝統を語りつづけています。ときには荒けずりで粗野に見えるかもしれませんが、インカのむかし話の中に、すばらしい祖先にたいする、人びとの忠実な尊敬のあかしをよみとってください。



もくじ

はじめに……加藤隆浩……………3

ペルーのむかし話……………

月の神マンチャコリ……………9

インカのはじまり……………19

黄金をなげた山……………27

吸血コウモリのはじまり……………32

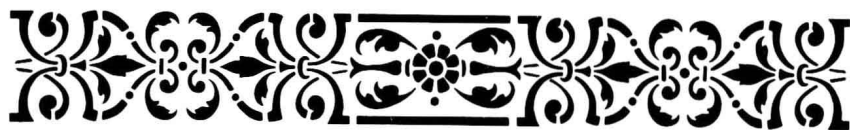
ワンカバンバのろい……………40

亡霊になった夫……………48

シカになった兄……………56

旅人が犬をつれていくわけ……………61





空^{そら}とぶ首^{くび} タツク・タツク 65

悪魔^{あくま}をだました男^{おとこ} 70

黄金^{おうごん}になつた小麦粉^{こむぎこ} 75

おろかなむすこ 80

天^{てん}からおちたキツネ 86

ウサギとキツネとピューマ 92

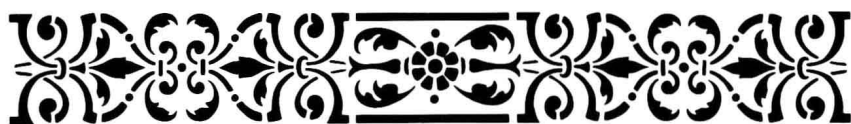
ボリビアのむかし話^{ばなし}

人^{ひと}はなぜはたらくのか 101

コンドルにさらわれたむすめ 108

くつ屋^やのかけ 113

インディヘナがロバをたいせつにするわけ 120



石のスープ 125

ずるがしこいキツネとインディヘナ 129

はらわたをかえせ 134

好奇心のつよいむすめ 140

キツネとコンドルの山のぼり 145

■解説 ●ペルー・ボリビアの昔話について 150

■参考資料 164

■さし絵・スズキ コージ

■ブックデザイン・工藤強勝

■地図・坂川知秋

■写真・ペルー政府観光局／ボリビア共和国大使館／加藤隆浩

ペルー
ポリビタ
のむかし話

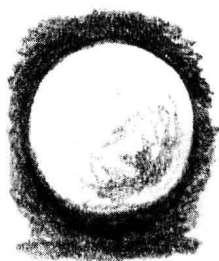






ペルーのむかし話

月の神 マンチャコリ



大むかし、この世には太陽がなく、まっくらでした。人間たちは、地面をほり、そのおくに、ほらあなをつくってすんでいたのです。

人間たちは、土をたべてくらしていました。たべられる土のとれるほらあながあって、人びとはつれだって、なん日もかけて、そのほらあなにいき、土をもちかえってくるのでした。

ある家で、むすめをひとりのこして、土をとりでかけることになりました。年ごろになったむすめのことをしんばいした父親は、



「そとにでてはいけないよ。ここで、じっと、まっているのだよ。」

と、いいきかせて、でかけていきました。

むすめが、まっくらなほらあなの中で、ひとりでまっていると、三日めに見知らぬ男がやってきました。

むすめは、ちょうど、薬草をかんていたところでした。なにかごそごそする音をきいて、へんにおもったむすめは、音のするほうへ、つばをはきかけました。すると、くらやみの中から、

「とんでもないことをしてくれたね。どうして、わたしの顔に、つばをはきかけるのだ。しみになって、のこってしまいうだろうに。」

という、男の声がきこえてきました。男はつづけて、

「ところで、おまえの両親は、どこにいるのだ？」

と、ききました。

「食料にする土を、ほりにでかけました。」

「おまえたち人間は、土をたべているのかね？　ほかに、たべるものはないのか





ね？」

「ありません。ほかに、なにをたべるというのですか？」

むすめがたずねると、男は、

「これからは、わたしが、ここにもってきたものを、たべるがいい。」

と、いいました。

この男は、マンチャコリ、つまり夜空にのぼる〈月〉だったのです。

「さあ、この実をとるがいい。」

といって、マンチャコリは、ソンピキ、パマキ、プチャタロキなどの木を、うえてくれました。そして、むすめに、

「両親がもどってきたら、つたえるのだよ。木に実がなくても、いちどにぜんぶとってしまつてはいけない。また、ちがう木の実を、まぜこぜにとつてはいけない。そして実は、じゅくしたものだけ、とるようにとね。」

というと、マンチャコリはかえっていききました。

両親がもどってくると、むすめは、じぶんの身におこったことを、すべてはな

しました。それをきいたみんなは、大いそぎで、木にかけよりました。木には、もう、たくさんの実がみのっていました。

ところが、みんなはマンチャコリのいいつけにしたがわず、てんでに実をみで、むさぼり食ったのでばらばらにおとされた実は、ごちゃまぜになり、実をみんなとられて、まるぼうずになった木もありました。

そこへ、マンチャコリがやってきました。いいつけにそむいた人びとが、大あわてでにげようとすると、みんな、たちまち虫にかわってしまいました。いま土の中にすんでいるカイツイコリや、ウマイロという虫は、このとき人間たちがすがたをかえた虫です。

人間のままのこったのは、むすめと、むすめの両親、妹の四人だけでした。やがてむすめは、マンチャコリの子をみごもりました。

むすめが子どもをうむとき、マンチャコリはいました。

「この木の枝をつかんでいなさい。そうすれば、いたくないし、やけどすることもないからね。」



そういつてマンチャコリは、ツイリトシの木を、ゆびさしました。ところが、むすめは、オロペルの木の枝を、つかんでしまったのです。このため、むすめは、子どもをうむとうじに、やけ死んでしまいました。なぜなら、生まれてきた子どもは、人間ではなく、まっかにもえた火の玉だったからです。この子どもが、カツイリンカインテイリ、つまり「太陽」でした。

カツイリンカインテイリには、ながいしっぽがありました。マンチャコリは、そのしっぽをこまかくきって、いいました。

「これは白人、これは黒人、これは悪人、これは善人。そして、このさいごの小さなきれはしは、アシャニンカ族（アンデス山脈の東斜面のセルバ、アマゾ）だ。アシャニンカ族は、ときがたてば、人の数がすくなくなるだろう。」

やがて、風がたいそうつよくふき、白人、黒人、善人、悪人、アシャニンカ族をふきとばしました。こうして人びとは、あちこちの土地に、べつべつにすむうになったのです。

つぎにマンチャコリは、むすめの父親をよびました。父親は、マオンテという

